

# 素人小説

第9回「未来への想い」



株式会社 BSO

## 1 第9回「未来への想い」

- ・ 勉強会の開催
- ・ 世界のひとつ化
- ・ 高度情報社会の到来を迎える経営を目指す
- ・ 共存共栄がこれからの「事業」の基本

## 勉強会の開催

田上修三は、自分の会社が赤字になっていく訳ではないのに、先行きに不安を抱く事が日増しに強くなっていった。この不安感は自分の気の弱さだと思っていたが、先が見えていない事に起因していると気がついた。

今は激動の時代であり、誰も将来を予測することは出来ないが、その時その時に状況に応じて手を打って経営をしていかざるを得ないという考えを彼は今まで持っていた。しかし、時代は構造的に変わっており、このような過ごし方では、時代から取り残されてしまうのではないかと思うようになってしまった。

田上は、やっと50才になったはかりであった。父親から経営を引き継いで12年になる。また、父親が他界してから8年が過ぎていた。父親の堅実な経営をいつの間にか自分自身も知らず知らずの内に引き継いでいることを苦笑しながら、異業種交流会などで親しくなった経営者仲間、「これからの企業経営についての勉強会をやらないか」と声をかけることにした。数人が賛同してくれた。賛同してくれた者のみで勉強会を開くことにしたが、自分達だけでは、十分なことが出来そうにもないと、話題提供者を毎回招くことにした。

初回は現状意識の打破を狙うべく、「21世紀型ビジネス」と題して、世界の

経済動向を体感的に収集し独特の経済世界観をもっている某ビジネスコンサルタントを話題提供者として招くことにした。

このコンサルタントは、21世紀初期では、次のような特質を考慮して企業経営を行うことが必要になってくると話した。

### 世界のひとつつ化

世界の人口はここ数十年で倍の60億人を越したという。満員電車の中と同じような環境で、生きて行かざるを得ず、この状況はますます進行していく。

そして、人間は、環境保全に力を注いだとしても、もはや人工的自然の中で生きていくのがやっつとであろうという話である。

また経済活動においては、発展途上国とか先進国とかいった国単位で捉える時代ではなくなる。都市間の経済水準の縮まり、ひとつひとつの都市が特徴を持ち、都市が共生し航空機を移動手段として世界がひとつひとつになって動く時代になるだろうという。いわゆる「臨空社会」の到来である。そして、それ以外の地域は、文明の進歩から取り残され、「産業都市」と「田舎」という二極化社会を仮説した。

また、生活文化の創造は、ヨーロッパが歴史的深さと広さを持つており、それ以外の地域では本当に味わいのあるモノは創造できないのではないかとのこと。その発言を聞いた時は大いに異論を唱えたかった。しかし、冷静に考えると確かにそう考えて、自分の事業を考えた方が賢明であると考えた。

また、商流・物流・金流・情報流などの「流通」「マーケティング」のノウハウは、やはりアメリカが世界の先進国であろうという。特にインターネットを中心とした情報技術は米国に対して日本の遅れは18ヶ月程度という見方もあるそのうである。これはすぐに追いつける活用水準ではなさそうであると感じた。

田上は、米国の情報技術が見学できる機会を探して、もう少し積極的にそのノウハウの活用を検討する必要性を痛感した。

また、東南アジアや中国が世界の生産基地になるという。

今までモノづくりの先進国であった日本は、人件費が高すぎて製造業に不向きになりつつあるという。そして、製造業に重要な役割を果たす集団力が、日本では薄れつつあるとも指摘していた。

さらに、東南アジアや中国の産業都市国家といわれる地域では、製造技術はも

はや日本のレベルに近づきつつあるとの助言にも似た発言がなされた。それには製造業を営む田上をはじめとしたメンバー全員、痛感していることの更に駄目押しをされたように感じた。

とは言っても日本には、まだまだ沢山良いものがあるともその人は言った。生産技術は世界最高であるし、生産の管理技術も素晴らしい、そして色々な物を集めて製品を作る、いわゆる雑貨商売のような事業の仕方は、未だ日本の得手とする分野であるという。

今まで井の中の蛙でモノづくりで黙々と励んでいた時代が終わりに来ていることは分かった。

そこで、田上は自分の会社ではどのようなモノが世界から求められているのかを真剣に考えてみた。今までのような「モノづくり」ではなく、世界に提供している会社とタイアップし世界が求める「価値づくり」をする会社への変身を話を聞きながら考えていた。

### 高度情報化社会の到来を迎える経営を目指す

その話は続いた。インターネットを中心とした超時空社会の実現が急速に進むという。

アメリカ社会ではB2B（企業向けビジネス）、B2C（消費者向けビジネス）といったEコマース（電子商取引）が急激に拡大。この3、4年で企業間取引は、全米の企業間取引総量の10%近くまで拡大する。女性のインターネット利用者が今年男性を追い越し、生活の一部化が急激に進むだろうと言う。

最近よく耳にするようになったが、まだ先のことだと思っていた田上は度肝を抜かれた。特に購買意欲を誘導するインターネット上のワンツーワン・マーケティングのシステムは、これまでのプロ級の営業マンに代わるだけでなく、同時に多数の人々に対応することが出来る。それを聞いた田上はおとぎの国に連れて行かれたような心境であった。

時間、距離に制約されない、言語に制約されない、人間以外とのコミュニケーション、そしてパーソナル・コミュニケーションが世界規模で広がるという。田上は度肝を抜かれる一方で遠くに感じていた海外・外国が身近になりそうなものになることを感じ出していた。

またコンピュータなどの情報機器は、使い方次第で個人の知的能力を無限に増殖してくれるものであることが分かり、これから意欲的に挑戦してみようと考えた。

## 共存共栄がこれからの「事業」の基本

「社会との共存共栄」がこれからのビジネスで大きな意味を持つという話は、最初何を言っているのか分からなかった。しかし、これからは社会・市場・顧客が求める価値を提供し、その見返りに対価をもらう関係が、企業が存在できる原点であるという。我々があまり意識していなかった「ビジネス」の基本を再確認させられるものであった。

「共存共栄」は、期待に応えるビジネスから、さらに進んで「感動」を与える事が重要になってくる。そのために色々な工夫と知恵が、高付加価値経営をもたらすという。この話を聞きながら、田上は今までの会社の風土や社員の躰、さらには社員教育を抜本的に考え直すべきだと思った。

また、「共存共栄」は、お客様との関係だけでなく、社員や一般社会との間でも重要な要素になってくる。すなわち、企業は単なる経済的活動を行うところではなく、社会にとって「市民」としての存在の意味が強まり、これを軽視するとは出来なくなっていくという。また、企業経営の環境の変化は、沈静していくのではなくますます強くなっていく。変化に強い環境適応体にしていかなければならないということのようである。

そのために、リエンジニアリング、リストラクチャリング、「脱皮と変身」が不可欠であり、社員が存在出来る企業にしていかなければならないとのことである。田上は自分の会社が、それに程遠い存在であり、これから頭を悩まさなければならなくなると感じた。

企業と社員間の共存共栄の話では、経済的共存共栄の体制を創らなければやっていけないことは既に田上も経験し実感として分かった。

しかし業績貢献型とか変動費型の賃金制度の導入を示唆された。しかし、そのような賃金制度への馴染みが全くなく、現在の制度を根本的に換えていかなければならないように、抵抗感を覚えている自分に気づき、反省するのであった。

精神的共存共栄では「理念の経営」の話があった。耳慣れない言葉であった。企業の運営に当たっては、「線の組織」から「面の組織」へ変わりつつあるという。これからはピラミッド型の組織ではなく、アメーバのように状況に応じて機構が変化する組織となり、社外と社内の境界線上に社員が並び、社員の役割や社員間の連携は状況に応じて変化する。いわゆるサッカー型の組織運営のようになるという。グループウェアや全員参加の経営、そしてナレッジ・マネジメントといった組織運営のための技術がこれからますます開発され活用されていくことになるという。

この辺までくると田上は、自分が何も知らないで経営してきたことが怖くなった。今日の話は、田上にとつて全て納得できたわけではなかったが、やはりこの勉強会を設けて良かったと思った。

田上には、もやもやしていた思いがいくらかすつきりしたことに満足感があつた。

また、声をかけたメンバーも、知ったことによる不安感の増大というよりは、むしろ「これからやらなければならないこと」が大分明確になった様子で、さすがしささえ感じているようだ。

この会合の今後を楽しみにして皆が散会したことに田上は満足していた。

おわり